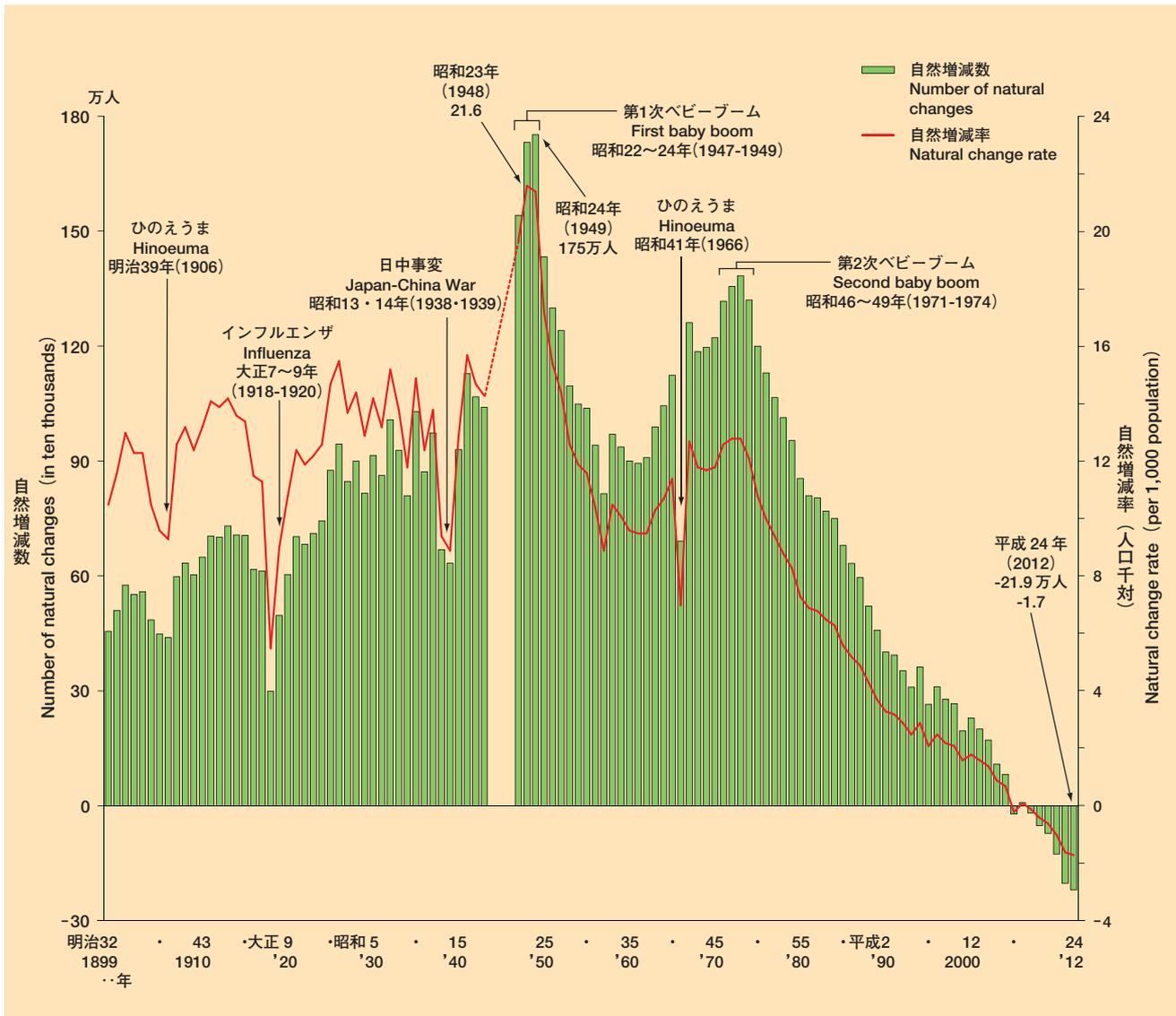


自然増減の動き Natural change

自然増減数・自然増減率は6年連続でマイナス

自然増減数及び自然増減率の年次推移—明治32～平成24年—
Trends in natural changes and natural change rates, 1899—2012



平成24年の自然増減数（出生数から死亡数を減じたもの）は△21万9128人で、前年の△20万2260人より1万6868人減少し、自然増減率（人口千対）は△1.7で前年の△1.6を下回った。

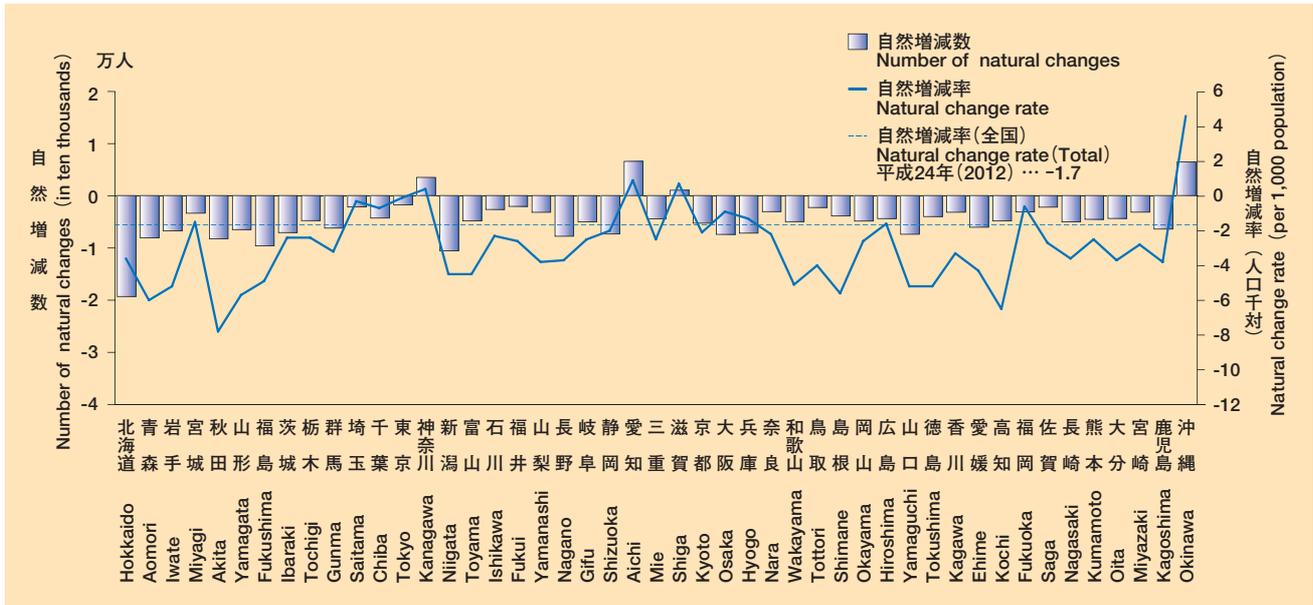
自然増減数の年次推移をみると、第2次世界大戦前は増加傾向であったが、戦後は第1次ベビーブーム期の昭和24年の175万人をピークに減少した。その後、昭和37年に再び増加に転じ、46年から49年の第2次ベビーブーム期には130万人を超えていたが、50年以降は、出生数の減少により自然増減数も減少し、平成元年に50万人を割った。

平成2年からは出生数は横ばいであったが、人口の高齢化による死亡数の増加により減少し、11年には20万人を割った。12年には増加したものの、13年以降は出生数の減少と死亡数の増加の双方により減少し、16年には10万人を割り、17年には統計の得られていない昭和19年から21年を除き、現在の形式で統計をとり始めた明治32年以降初めて出生数が死亡数を下回りマイナスとなった。平成18年はプラスとなったものの、19年からは6年連続でマイナスとなっている。

出生数が死亡数を上回った県は4県

都道府県別にみた自然増減数及び自然増減率—平成24年—

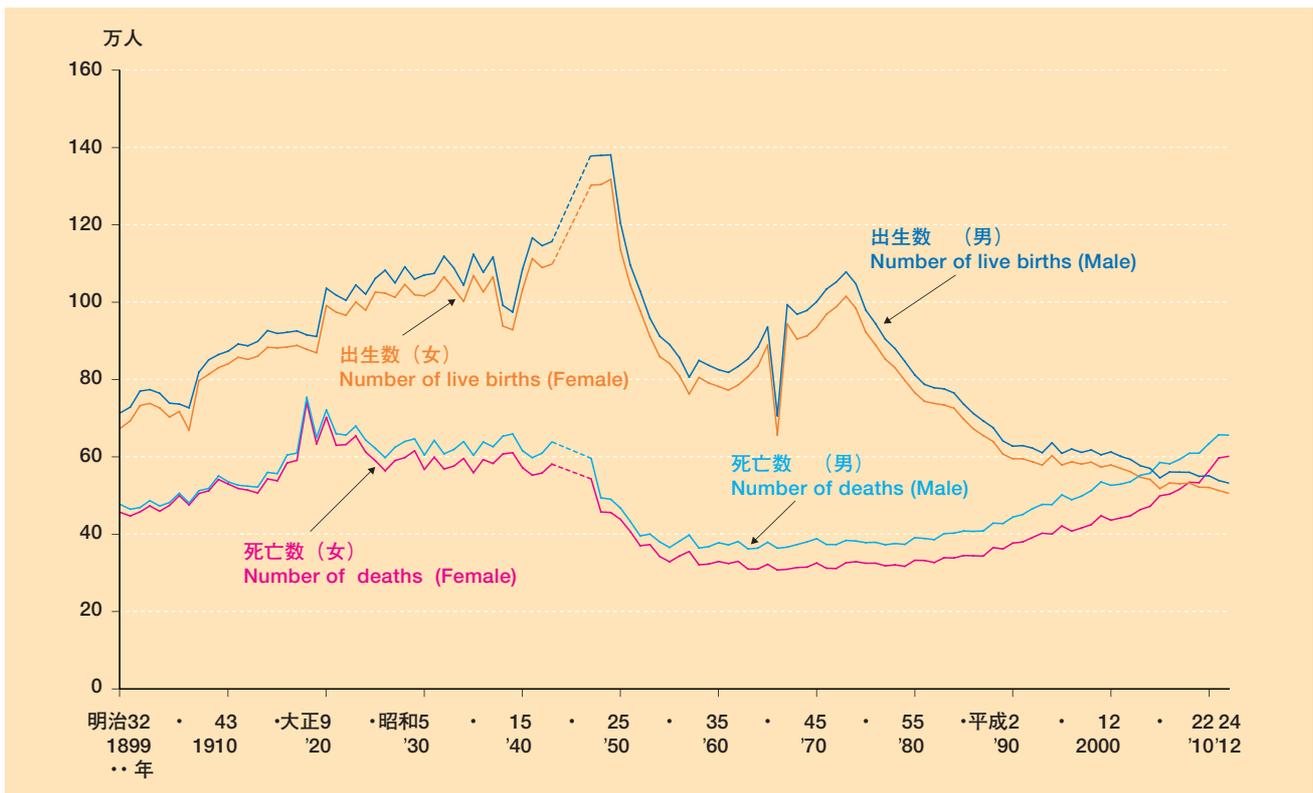
Natural changes and natural change rates by prefecture, 2012



自然増減数は男は平成17年、女は20年以降減少

性別にみた出生数及び死亡数の年次推移—明治32～平成24年—

Trends in live births and deaths by sex, 1899-2012



自然増減数を都道府県別にみると、出生数が死亡数を上回った県は、神奈川県、愛知県、滋賀県、沖縄県の4県となっている。自然増減率（人口千対）をみると、最も高い県は沖縄県で、4.6となっており、最も低い県は秋田県で△7.8となっている。

出生数と死亡数の年次推移を性別にみると、統計の得られていない昭和19年から21年を除き、現在の形式で統計をとり始めた明治32年以降、男は平成17年に初めて出生数が死亡数を下回ってから自然増減数の減少が続いており、同様に女は20年以降減少となっている。